―― 随 想 ――

コンピュータとの付き合い

教育学部　金　子　　劭　栄

心理学の分野でのコンピュータ利用は決して新しい話ではない。コンピュータ利用を扱ったものが心理学者の論文となり、学会のシンポジウムのテーマになったりする。私も年数だけはかなり長く利用してきている。ただ、十分に利用しきっているとはとてもいえない。コンピュータをほとんど知らずに使っているからであると思う。

私が何も知らずにここまできたのには以下の事情もある。まだ院生であった頃、非常に親切な先生（心理学者）に巡り会い、教えてもらったのが付き合いのはじめである。その先生は、本でいくら勉強してもだめだから、わかるところから簡単なプログラムを作って動かしてみることだ、と言われ、その通りやってみるとコンピュータが動いてくれたのである。それ以後その面白さにひかれ何も知らぬままに使ってきた。きちんとした教育もほとんど受けていない。ハードはもちろんコンピュータの仕組みも何もしらぬままに来てしまい、しかもコンピュータは動いてくれている（私自身は何も知らないに困らないのである）。コンピュータ利用は確かにこれでもいいのかもしれない。

わけもわからずにやってみたおかげでほどほどに使えるようになったが、一方ではコンピュータ不安のようなものもある。やはり院生の頃友人が１Ｈ　と１Ｈ１とを間違えて、ズッシリと重い出力用紙をやっとの思いで研究室まで抱えてきたこともあった。各種の制約がきちんと設定されているのだが、やはりブレーキがきかなくなったらとの心配がある。ＴＳＳ端末でなかなか反応してくれないと何か妙なことをしてしまったのではないかと心配になる。

仕組みをもう少し知っておれば、不安解消もそうだがが、もっと面白い研究ができるとも思う。しかし、必要に迫られた時に、センターの方々やユーザーの詳しい方々に教えてもらってはやっているのが実状である。時にはそんな時でも、こんなプログラムを作っておけば、あるいはこのプログラムをこんなに改造すれば便利だな、と思いながら、時間がなく、また終わってもその仕事もやめてしまう。こんな繰り返しでさっぱり進歩しない。何とか勉強したいとは思っている。

私が主として利用するのは統計処理であるが、因子分析等の多変量解析が多い。また質問紙調査をすることが多く、各質問項目に対する反応をいろいろな角度から検討するのにも利用しているが実に便利である。各項目への反応分布をとることから始め、他の基準との関連、全項目に対する反応の相関分析等、自分の好みの分析ができる。

プログラムは、院生だった頃はがんばって自分で作っていたが、次第にもっと詳しい人達がよいものを作りしかも公表してくれるようになると、そのままコピーする後ろめたさのようなものを感じながらも、使用システムに合うように修正したり、自分の好みに合うように入出力、ＦＯＲＭＡＴの変更をしたりだけをするようになった。ところが最近ではＳＡＳのような便利なものが出て来てしまい、

もうプログラムを作らなくてもよく、後ろめたさも感じなくてもよくなってしまった。ＳＡＳを使ってみると確かにこんなに便利なものはない。結果を図示することまでやってくれる。ただ、手作りプログラムのように好みのＦＯＲＭＡＴ指定ができない等の不便さがあるが、そこまで要求することは簡便さが失われてしまう可能性もあり、無理であろう。

コンピュータ利用の仕方もどんどん変ってきたが、ＴＳＳの一般化、ＳＡＳの導入、センターコマンドの開発等により、重いカードを運ぶことや、プログラム作成の苦労から解放され、何とも気楽に利用できるようになったものだという実感がある。